

小学校社会科における新聞活用に関する研究 —「読解力」の育成に着目して—

小笹直也

1. 論文構成

序章 問題の所在と研究の目的

第1節 問題の所在

第2節 研究の目的と方法

第3節 論文の概要

第1章 読解力の定義と意義の整理

第1節 「読解力」に関する能力の整理

第2節 社会科における「読解力」の意義

第2章 先行実践の検討

第1節 分析の視点

第2節 先行実践の分析

第3節 先行実践の分析と課題

第3章 小学校社会科における「読解力」の
育成を目指したNIE授業構想

第1節 構想のねらいと意義

第2節 内容設定と新聞記事について

第3節 授業実践の構想

終章 研究のまとめと今後の課題

第1節 研究のまとめ

第2節 今後の課題

参考文献・論文・URL・資料

2. 問題の所在と研究の目的

(1) 問題の所在

本研究では、PISA型「読解力」や『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説』の中で言われる「問題解決に必要な社会的事象に関する情報を集める技能」、「収集した情報を社会的な見方・考え方によって読み取る技能」、「読み取った情報を問題解決に沿ってまとめる技能」等を育成する手法として新聞を使った教育「NIE（エヌ・アイ・イー）」に着目している。これを踏まえ、筆者は以下の2点を問題点として考える。

1点目として、読解力は主に国語教育で育成されるものであるとの認識が強いことが挙げられる。文部科学省『「読解力」向上に関する指導資料』によるとPISA型「読解力」は国語教育を中心に、あらゆる教科や領域で育成するこ

とが求められている。しかし、わが国では、国語教育を想定した上で「教材としての文章の内容を正確に読み取る」という意味合いで用いられることが従来から多かった。そのため社会科における「読解力」の定義や「読解力」育成の意義について明らかにしていくことで、社会科での「読解力」育成の足がかりとなるだろう。

2点目は、社会科で「読解力」を育成するための資料活用についての研究が進んでいない点である。大阪教育大学附属平野中学校の井寄芳瞬氏は、「社会科学習は多様な資料に即して展開する。学習の深まり広がりや教材開発の質と資料を効果的に生かす授業技術に大きく左右される」と述べる。しかし一方で「子どもの発達段階に即して資料活用能力をどう高めているのかということに関しては、十分な研究がなされてこなかった。授業で資料を利用しても、資料を批判的に分析したり、その限界性を指摘したりするような能力を鍛えるものになっていない」と言及している。「読解力」育成を目指した新聞活用を考えるうえで、この問題を解決する必要があると筆者は考える。

(2) 研究の目的と方法

本研究の目的は、「読解力」の定義と意義を整理することと、これまで行われてきた「読解力」育成を目指した小学校社会科NIE実践における課題を見つけ、新たにその課題に対応した社会科NIE授業の理論と方法を提案することである。

研究の対象として、小学校高学年の社会科授業の実践を扱うこととする。

本研究の方法としてはまず、「読解力」の定義をPISA型「読解力」とNIEにおける「情報読解力」をもとに整理した。また、ここで整理された「読解力」と社会科の目標との関連について考察した。次に、社会科で「読解力」を育成する意義について三者の見解を用いて示した。「読解力」の育成と新聞活用との関連について、NIEの研究者の見解を参考に考察

した。そして、ここで得られた定義と意義をもとにこれまで行われてきた「読解力」育成を目指した小学校社会科N I Eの先行実践について分析をした。詳細は後述するが、「情報の取り出し」「事象の内容間の関連構造」「表現方法・内容」の3つの視点から分析を行い、先行実践における特徴と課題について考察した。最後に、考察した内容をもとに授業構想を行い、「読解力」の育成を目指した小学校社会科N I Eを展開する授業を提案した。

3. 研究の概要

(1) 第1章 読解力の定義と意義の整理

第1章第1節では本研究で扱う「読解力」を定義するために、PISA型「読解力」とN I Eで育成すべき能力とされている「情報読解力」の定義や育成プロセスを整理し、考察した。辞書上の読解力、PISA型「読解力」、「情報読解力」について整理したものが次の表である。

【表1-1-3-1 辞書上の読解力、PISA型「読解力」、「情報読解力」の比較】

	読解力	PISA型「読解力」	「情報読解力」
定 義	文章を読んでその意味を理解し、解釈すること	自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させるために、テキストを理解し、利用し、熟考する能力	情報を知る・わかるだけでなく、背景を熟考し、自分なりの意見や考えを持ち、それを表現しながら社会への参加・参画を考える力
読解のプロセス	①文章を読み意味を理解・解釈する（受け手の側から理解する）	①情報の取り出し ②解釈 ③熟考・評価 ④表現	①情報を得る・知る ⇔ ①When②Where ③Who④What⑤How ※ ②情報の背景が分かる ⇔ ③Why ※ ③判断する ⇔ ④What ShouldHow Should ※ ④意見や考えを発信する
読み解く対象	文章や物事の意味	情報や内容形式や表現 信頼性や客観性 引用や数値の正確性 論理的な思考の確かさ	新聞によって提供される事象 問題・課題の背景 紙面構成における新聞社の価値判断

※（ ）内は【表1-1-2-1 情報を読み解く「問い」の分類】と対応。

辞書上の読解力が「文章を読み、その意味を理解すること」であるのに対し、PISA型「読

解力」と「情報読解力」は、定義の範囲を「情報を得る・知る」だけでなく、「情報と情報の関係を推論・比較し解釈すること」、「情報を自らの知識や経験に位置づけて理解・評価すること」、「考えたことを表現すること」といったように、「思考・判断・表現」することまで含めていると考える。なぜ読解力で「思考力・判断力・表現力」までもが求められるのかについては、表現することが読解を評価するための手段であること、読解することと「思考・判断・表現」することは不可分の関係にあるからと考察した。またこのことからPISA型「読解力」や「情報読解力」は、基礎的な知識及び技能を活用して課題を解決するために必要とされる「活用型学力」に位置づけることができると考える。

読解のプロセスにおいてもPISA型「読解力」と「情報読解力」は類似している部分が多いことから、筆者は本研究における「読解力」の定義を「テキストから情報を読み取るとともに、その意味や背景を考え、適切に表現する力」とした。また、読解のプロセスを①情報の取り出し②テキストの意味や背景の解釈③評価・判断④表現とした。

第1章第2節では、社会科で「読解力」を育成する意義について、神戸女子大学准教授の佐藤博樹氏、新潟市歴史文化課元所属の大平惇一氏、大阪教育大学附属平野中学校の井寄芳瞬氏、3者の見解を用いた。各論者の見解から、社会科で「読解力」を育成する意義として「資料活用 of 技能」としての意義、「課題追究のための思考力」としての意義、「社会に参加する態度の形成」としての意義に類型されると考えた。「資料活用 of 技能」としての意義は、社会科で育成が求められる能力の一つである「資料活用 of 技能」と関連している。「課題追究のための思考力」としての意義は、事象の内容間の関連構造を考えることが、社会科における社会認識の能力を向上させるとし、関連構造を考える際の能力として「読解力」が必要であることを示した。「社会に参加する態度の形成」としての意義は、社会科における「意思決定」や「評価・判断」する際の能力に関連している。情報を取

り出し、解釈した後、それを自分はどうのように判断・評価するのか、すなわちそれは「どのように社会と関わっていくか」ということを表している。「読解力」では読解と表現を一体のものとするため、「読解力」の育成が社会に参加する態度の形成につながっていくと考える。

また第2節では、「読解力」育成と新聞活用がどのようなかわりを持つかについて「情報読解力」に関する研究と元横浜国立大学教育人間科学部教授の影山清四郎氏による見解から導き出した。「情報読解力」に関する研究からは、多くの社会的事象を扱った新聞を学習材として活用することで、社会認識の形成、資料としての活用、社会に参加する態度を形成する等といった意義が見出され、これは、「社会科で『読解力』を育成する意義」と重なる点があることが分かった。影山清四郎氏による見解からは、新聞が持つ7つの特性のうち①一覧性、②解説性、③詳報性、⑦隠された真実の発掘力などが事象の内容間の関連構造を考える上で有効であると考察された。これらのことから「読解力」育成と新聞活用には親和性があることが明らかとなった。

（2）第2章 先行実践の検討

第2章第1節では先行実践の分析をするための視点を示した。それは「情報の取り出し」「事象の内容間の関連構造」「表現方法・内容」である。「情報の取り出し」は、どのようなテキストから、どのように（方法）、どのような情報（内容）を取り出しているのかについて分析していく視点である。「事象の内容間の関連構造」は、「読解力」を働かせて、多面的・多角的な見方で捉えるべき「事象の内容間の関連構造」とその妥当性について分析する視点である。「表現方法・内容」は、テキストから情報を取り出し、その意味や背景について考えたことを、どのように表現するのか、その方法と内容について分析していく視点である。

この視点に基づき、第2章第2節では3つの先行実践を分析した。分析した結果をまとめたのが以下の表である。

先行実践の分析を行った結果、「読解力」の

育成を目的とした小学校社会科 NIE の実践について、「複数の新聞の読み比べを通して学習者の問題意識を醸成させる」という特徴と、「事象の内容間の関連構造」が、単元の中で段階を踏んで構築されるという特徴を明らかにした。

また、PISA 型「読解力」の課題と同様に、先行実践においても「表現」することが十分にされていないという点が指摘された。關実践や社会科チーム実践では、選んだニュースについて考えたことを自分の意見として表現する活動が行われている。しかし、必ずしも単元の学習過程の中で取り出した情報を解釈・熟考し、判断したことを表現するものとはなっていない。これらの表現活動だけでは、記事の書き方や紙面構成による情報の伝わり方が違うことや、情報を受け取る側の、紙面から情報を正確に読み取り正しく判断することとの関連が少ないと考えられる。「読解力」は表現と一体であるとの視点に立ち、これらがうまく機能する

【表2-3-1-1 先行実践の特徴】

実 践	情報の取り出し	関連構造	表現方法・内容
關実践	・主に新聞からの取り出し ・地方紙の読み比べにより問題意識の醸成につなげている。	・既習事項が事象の内容間の関連構造を考える際の手がかりとなっている。	・自分の意見を伝える活動は行っているが、「解釈」「熟考・判断」との関連については不明。
社会科チーム実践	・主に新聞からの取り出し ・同じ新聞の異なる面で読み比べている。	・教師による発問や手立ての工夫により関連構造を捉えさえる。 ・課題や内容が予めワークシートに書かれているため考える視点を獲得できる反面、多面的に考える機会を欠く。	・自分の意見を伝える活動は行っているが、「解釈」「熟考・判断」との関連については不明。
橋本実践	・主に新聞からの取り出し ・同じテーマに対する2つの考え方を提示することで、問題意識を醸成につなげている。	・単元の中で段階を踏みながら関連構造を理解していく。	・根拠を示しながら自分の考えを表現するところまでは至っていない。

よう授業構成を改善していく必要がある。

（3）第3章 小学校社会科における「読解力」の育成を目指したNIE 授業構想

第3章では、第1章の定義や意義、第2の

先行実践の分析を踏まえて授業構想を行った。対象は第5学年であり、秋田県の魚である「ハタハタ」に関する記事を用いて、「情報の取り出し」「意味や背景を考える」「表現する」活動を取り入れた授業を構想した。「情報の取り出し」では、先行実践の特徴として挙げられた「複数の新聞の読み比べ」を通して学習者の問題意識を醸成させるようにすること、また、段階を踏んで事象の内容間の関連構造を考えることができるように学週活動を配置すること、ハタハタの持続的な発展について調べたことをもとにして話し合ったり、学習したことを新聞等にまとめたりする活動を通して、課題であった「単元の学習過程の中で取り出した情報を解釈・熟考し、判断したことを表現する」ことを改善していく、以上3点をねらいとした。以下は単元の構想である。

① 学年・単元名

5年「ハタハタの新聞記事から漁業について考える」

② 単元の目標

- ・新聞や各種資料の読み取りなどを通して、ハタハタ漁は自然環境とのかかわりの中で様々な工夫をして営まれていることを捉えるとともに、漁獲量の減少などの諸課題を抱えながらもその解決のために工夫や努力が重ねられていることを理解することができる。【知識及び技能】
- ・ハタハタ漁に従事する人々の工夫や努力をハタハタの生息数や漁の方法、漁獲量、収入向上、資源保護などの面から考えたり、それに取り組む人々の思いを考えたりすることで、自分たちの食生活とのつながりに気づき、ハタハタの発展について話し合いや新聞等で表現することができる。

【思考力・判断力・表現力等】

- ・秋田県の魚であるハタハタやハタハタ漁及びそれに従事する人々に関心をもち、意欲的に調べることができるとともに、地域の漁業経営をふくめたこれからの我が国の水産業について考えようとする態度を育む。

【学びに向かう力、人間性等】

③ 単元の全体計画

②単元構想（総時数10時間）

場面	目 標	主な学習活動	時数
情報の取り出し	○ 秋田県の魚であるハタハタやハタハタ漁及びそれに従事する人々に関心をもち、ハタハタに関する学習問題をもつ。 【学びに向かう力、人間性等】	・新聞記事を読んでハタハタについての情報を読み取る。 ・ハタハタに関して疑問に思うことや新聞の読み比べを通して気づいたことをもとに学習問題を作る。	2
背景や意味を考える	○ 新聞記事やハタハタに関する諸資料の読み取りを通して、ハタハタ漁の概要や漁獲量の減少などの諸課題ハタハタ漁に従事する人の工夫や努力について理解することができる。 【知識及び技能】	・ハタハタ漁や禁漁の経緯、ハタハタ資源の保護等に関する情報について調べる。 ・調べたことや分かった情報について表や図にまとめる。	3
	○ ハタハタ漁に従事する人々の工夫や努力をハタハタの生息数や漁の方法、漁獲量、収入向上、資源保護などの面から考えたり、それに取り組む人々の思いを考えたりすることで、自分たちの食生活とのつながりに気づくことができる。 【思考力・判断力・表現力等】	・ハタハタ漁に従事する人々の工夫や努力をハタハタの生息数や漁の方法、漁獲量、収入向上、資源保護などの面から考えたり、それに取り組む人々の思いを考えたりする。	2
表現する	○ 地域の漁業経営をふくめたこれからの我が国の水産業について考えようとする態度を育む。 【学びに向かう力、人間性等】	・ハタハタの持続的な発展について調べたことをもとにして話し合う。	1
	○ ハタハタの持続的な発展について話し合いや新聞等で表現することができる。 【学びに向かう力、人間性等】	・学習したことを新聞等にまとめる。	2

4. 今後の課題

本研究を通して得た課題を2点提示する。

1点目は「読解」に関する部分においての課題を指摘できなかった点である。本研究で「読解力」育成の課題として挙げられたのは「表現」に関するもののみであった。しかし、読解の本来的な意味を考えた場合に「情報の取り出し」や「意味や背景を考える」部分においても課題を見出す必要があると考える。実践例の収集が不十分であったことや、や実践分析の視点が適切でなかったため底目での分析には至らなかった。

2点目は、「読解力」育成の社会科NIE授業が構想に終わってしまい、実践することができなかった点である。第3章において構想した単元は、児童にとって適切なものであるかどうか分からないままである。また、小学校ならではのNIEを展開できたのではないかと考える。難易度的には中学生や高校生のレベルの授業内容となってしまう。方法、難易度等が適切であるかどうかは、実際に教室で児童を相手に実践してみなければ分からないので、今後実践する機会があるならば、児童の実態や学習内容と照らし合わせ、よりよい社会科NIE授業として改善していきたい。